



名大トピックス

No.119 平成15年4月18日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TeX(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

平成14年度 卒業式が挙行される ～ 高度専門職業人としての自覚を持って ～



CONTENTS

平成14年度卒業式～総長の辞(大学院・学部).....	2	大学史資料室がワークショップを開催.....	16
男女共同参画室を設置.....	13	工学部・工学研究科広報ビデオ完成.....	17
文学研究科が公開シンポジウムを開催.....	13	工学研究科・関連研究科・センター研究者総覧完成.....	17
太陽地球環境研究所が「社会連携連絡協議会」を設置.....	14	本学関係の新聞記事掲載一覧(15年3月分).....	18
博物館が「毛利フォーフェラントコレクション」寄贈に対して 感謝状贈呈.....	15		



平成14年度卒業式が挙行される

3月25日、豊田講堂において平成14年度名古屋大学卒業式（学位記授与式）が行われ、松尾総長から学部学生2,194名に学士学位記が、大学院生1,520名に修士学位記が、246名に博士学位記がそれぞれ授与されました。

総長からは、大学院学生及び学部学生に対しそれぞれはなむけのことが贈られ、人生の新たなスタートを切る卒業生たちを激励しました。

また、本学の卒業式では初めての来賓として名古屋大学全学同窓会副会長太田和宏氏（豊田紡織㈱相談役）から同同窓会会長豊田章一郎氏（トヨタ自動車取締役

名誉会長）の祝辞の代読と御祝辞をいただきました。

式典が終了すると、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちによって、花束の贈呈や胴上げ、記念撮影など、卒業生はさまざまな形で祝福されていました。

なお、式典の様子はカメラを通じてシンポジオンホール及び豊田講堂ピロティにおいてライブ中継され、詰めかけた保護者らがスクリーンに映し出される映像を熱心に見つめていました。

また、昨年同様、インターネット上でもライブ中継され、内外に発信されました。





総長の辞（2003年大学院修了式）

松 尾 稔

名古屋大学は、本日ここに平成14年度大学院前期課程修了者1,520名に修士学位記を、後期課程修了者246名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに本学の教職員を代表して心からお祝い申し上げます。私は、常々、大学は国際公共財だと申ししておりますが、これに相応しく、この場には、異なる国々からの多くの方々が出席されています。

皆さんは、博士課程において、前期、後期を問わず、学習や研究を通して、多くの経験を積まれたに違いありません。ただし、学問や研究には完璧な頂点や終点はありません。いかに優れた成果であっても、そこへのプロセスの中での一つのマイルストーン（標石）とでも言うべきものであります。このようなことは十分自覚されていることと承知しています。しかしそうとは言え、多分、紆余曲折、長い間苦労して成し遂げた学問的、技術的成果が着実な礎石として実を結んだ満足感に浸りつつ、今、皆さんは、これから始まる新しい生活に対し、青春の気概に満ちた、澆刺とした気分で、ここに出席されているものと信じます。皆さんの高揚した気持が、目の輝き、表情を通して私たちにも伝わってまいります。

今後、皆さんはそれぞれ異なった道を歩まれますが、いずれにしても、教育研究者を含む高度専門職業人として自立しようとしているの方々です。次なる目標を高々と掲げ、一層の研鑽を積んでいただきたい。皆さんの将来が、明るく、大きく拓けていることを祈念し、そのスタ-ラインにつかれたことに対し、心から拍手を送ります。

さて、今年も本日の式辞原稿を書くにあたり、過去5回分を読み返してみました。私は、これまで常に、皆さんへ「臚の辞」を述べるというよりも、問題を提



起して共に考えていただきたいと、言ってきたことに改めて気付きました。そして本日もこのスタイルを変えるつもりはありません。何故なら、私には、適切な「臚の辞」を長々と述べる能力がありません。加えて、たとえいくつか思い浮かぶことがあるとしても、それらはむしろ一連の話の所々において皆さんへの「要望」として集約されており、それらを前後の脈絡なしに話したとしても、意味不明で、皆さんに対し、いかにも無礼だと感ずるからであります。

本日は、大別して、二つの項目について述べてみたい。第一の項目は「高度専門職業人」についてであり、第二の項目は「名古屋大学と今後の皆さんとの係わり」に関してであります。もちろん両者は深く関係しています。

冒頭に、皆さんのことを「教育研究者を含む高度専門職業人」と述べました。ここではまず、高度専門職業人として、皆さんが、具備すべきこと、あるいは留意しておかなければならないいくつかの課題を考えてみましょう。

まず第一に申し上げたいのは、皆さんのほとんどが、

雇用者と雇用上の契約を結ぶ社会に入っていくという点です。前期課程から後期課程に進学する人もこの中には約22%いますが、“今後も「親がかり」で”などと思っている人はいないでしょうから、広い意味では何らかの契約関係の下に所得を得る生活になるでしょう。

公団や特殊法人の廃止、再編・統合、さらには国立諸機関の法人化等も含め、10年で25%の国家公務員削減の実施がすでに始まり、給与や退職金も下がり、地方自治体もこれに追随しようとしていることは、ご承知のとおりです。一方で、特別なところを除いて、各企業の現在の経営状態が大変厳しい状況にあることも、ご存じのとおりです。近年の日本の状況について、“失われた10年”とよく言われますが、果たしてそうでしょうか。私には必ずしもそうとは思えません。心ある企業経営者も、無力な政治にいらつきながらも、“あらゆる分野において構造改革に苦しんでいる10年、ただし、駄目なら5年先にはガケツプチ”と言っています。

そこで思い出すことがあります。近年における、名古屋大学自身の、苦しみながらの大改革にも通ずる、「Reengineering」という言葉とその概念です。10数年前から「リストラ」が叫ばれ、人員削減が始まった時、M・ハマーとJ・チャンピーが唱えた概念です。チャンピーは、著書「リエンジニアリング革命」について言っています。“リエンジニアリングという用語は

小手先の技術的な感じを与えるが、核心は「絶えざる革新」であり、経営の初心に帰れ。これまでやってきたことを、「そもそも何故そんなことをするのか」と自問し、「もっと良い方法はないか」と考え、その間一貫して顧客本位で物事を考え、既存のやり方を変える。分業の否定、ヒエラルキー型組織の排除等々は、結果に過ぎない”と。しかし、「Reengineering」という用語は一時もてはやされただけで、いつの間にか忘れられ、最近は毎日のように「リストラ」が紙面をにぎわしています。

私は企業のこと、まして企業経営については全くの素人ですから、間違っているかも知れません。しかし、多くの財界人と本音で接する間に、数年前まで、用語「リストラ」が意味した内容が本質的に変わってきた、すなわち、チャンピーの言う「Reengineering」に変貌してきたように感ずるのです。かつて「リストラ」として実行されていたことは、現実に存在した「余剰人員」をカットしたり、配置換えで整理してきた、いわば余分な贅肉落としてありました。しかし現在「リストラ」と言われ、行われていることは、従来の仕事のやり方を根本から見直し、更なる合理化と減量を目指すという「Reengineering」の概念そのものに近付いている、と思えるのであります。

何故こんなことを長々とお話しているのか。まず第一に皆さんが入っていく雇用社会は、職種を問わず、大変厳しい競争社会であることを十分認識しておく必要があるからです。第二には、このような現実の厳しい状況の中であって、皆さんには、エリートとしての能力と活動が求められるに違いない、と考えるからです。

産学官とも、「独創的人材・創造的人材を育てよ」と言う、困難な注文を平気で出します。私の勝手な定義によりますと、両者共エリートだが、独創的人材とはエリートの中の特別人であって、これは「育てる」のではなく「育つ」のであります。「独創」とは人の真似をせず、自分自身の考えで、全く新しいことを始めることです。この意味で、例えば大学人たる私たち





に出来ること、あるいはやらねばならないことは、そのための環境を常に作り上げる努力を怠らないことです。大学や研究機関にとっては最も重要なことであり、皆さんの中の真に「独創的な人」にあつては、そのような整備された環境に居場所を得ることを心から望むばかりです。

これに対し、「創造」とは“初めて”作り出すことです。一人でなくてもよい、集団でもよい。ニーズを論理や感性で捉えて、先人が作った既存の知や技術を、新しいコンセプトによって連結させ、個性あるモノや組織や行動様式を創り出すことです。こちらの方の人材、つまり創造的人材は育てうる可能性があるし、また育てる努力をしなければなりません。しかし、これもまたそれほど容易なことではない。知識や、資金、さらには助言の提供を伴う綿密な環境条件を整えるのが器たる組織の役割であつて、要は皆さん自身の努力にかかっている、と言わなければなりません。

私自身の経験を一つだけ申し上げます。研究室の大学院生によく言いました。“乱読でもよい、議論や活動を通した乱学でもよい、あらゆる分野に興味を持って読み、行動し、印象に残ったものは書き留めておく、多種多様な知識や知恵を、頭の中に雑然とした形で、不安定な状態で詰め込んでおけ”と。頭の中に整理筆筒を作り、この知識はこの引き出しへ、この知恵はこの棚へ入れようなどと考えないことです。頭が痛くなるぐらいに雑然と、不安定な状態で入れておくのが

よい。何かをやりたいが方法が分からない、そういう状態の中で、ふと idea が浮かんだ時、それらが一挙に繋がり「創造」となつて実を結ぶことでしょう。そしてその時、皆さんは大きな感動を得るに違いない。

いずれにしても、天才や独創人を含め、いかなる人にとつても、無から有が生まれる筈がない。皆さんの努力と日頃からの研鑽が必須です。そして広い意味での社会的貢献を心から期待しています。

まだ第一の項目、「高度専門職業人」に関する話を終わりにすることができません。いつも言っていることですが、もう一点だけ申し上げたい。「高度専門職業人、Profession」としての倫理についてであります。特に、昨年度は、狂牛病問題に端を発した様々な食品問題や、金融機関等に関する組織がらみの反社会的行動（犯罪）が頻発したからです。皆さんは、今後、依頼者や雇用者に対し忠実でなければならない、高度専門職業人としての職業上の倫理と、一人の教養ある人間として、公衆に対して誠実、公平であろうとする、両者の立場の相克に悩まされる筈であります。すなわち、雇用者に忠実たるべき職業人としての倫理を守ろうとすることと、一人の人間としての自己の内面に有するモラル、社会に対して誠実に生きたいとする心の対決に何度も苦しむに違いない、と申しているのがあります。先に述べてきたように、「リストラ・Reengineering」がぎりぎりまで進んできている現在、このような状況は、増えることこそあれ、残念ながら減ることは想像しにくいのであります。

産官学いずれをとつても例外ではありません。組織の意に反しても“人間として誠実に生きる”と言うことは、大変難しいことです。しかし、そうすることが結果的には組織のためにもなる、と信じ、勇気を持って行動していただきたい。雇用者がやや漠然としている公的機関の研究者においても問題の本質は同様です。特に大学においては、これまで、「研究の自由」は、科学技術政策における基本的価値とされ、研究は科学者の自由で、個性的で、純粋な好奇心からなされるものであつて、ここには介入すべきでない、とされてきま

した。私の基本的立場も同様です。しかし、最近の大型科学技術、例えば、生命科学を例に考えてみましょう。多額の公的資金の投入のもと科学技術政策の立案を専門家主導だけに委ねてよいのでしょうか。この種の議論に深入りすることは、学者であると同時に、総長としての私としては、非常に危険であると思いつつも言っておかねばなりません。「上司たる教授の意向に反するから云々」というたぐいのことは、前述の一般問題と同次元であるから省略します。しかし、公的機関の研究従事者に対しては、漠たる国民の意思に代わり、将来の社会的価値を、倫理上の見地から明確に示しうる仕組みが早急に必要だと考えます。

さて、本日は第二番目の項目「名古屋大学と今後の皆さんとの係わり」に関して、2,3の具体的事例をもとに簡単に述べておきたい。

国立大学の法人化を直前にして、最近企業経営に対比させて、「大学経営・学術経営」なる用語が頻繁に用いられるようになってきました。これまでの話とも深く関連しますので、私が考える「学術経営」の概略を、まず述べることにいたします。なお、教育問題、職員問題等々を含む「大学経営」については、時間の都合もあるので省略します。

私は、「学術」とは専門に研究する「学問」と技術を含む「芸術」と考えています。「経営」とは計画に基づいて経済の成り立つ運営を行うことでありますから、「学術経営」とは、学術を、専門のバランスを考えつつ、経済的に成り立つように維持・発展させることだと考えています。この場合、重要な点は、大学における研究は、一つのターゲットに向かって一斉、かつ短期的に進めるのは特殊なケースであること、大学の研究者は本質的に、まず自分の興味が先行し、それぞれのベクトルがランダムに向いているのが特徴だ、という認識です。

とは言え、現在は、研究成果が国家利益と直結する時代であり、研究の内容も「重点分野」と「一般分野」に分けて考えるのが妥当と思っています。時流に乗って国の資金や外部資金を取り込み易い研究分野は、現

在及び近未来の国家利益に貢献する部分も大きく、非常に大事です。一方で、競争的資金がとりにくい、いわゆる流行っていない分野 - しかし人類共通の知的資産として極めて重要な研究 - が大学では行われていません。例えば、特殊な言語や、現在は誰も注目していないが、将来学術面で「コア」となるかも知れない基礎的研究の分野であります。これらの分野にも研究費が行き渡るように、経営を成り立たせていくのが「学術経営」であり、基幹総合大学の使命だと考えています。なお、倫理上の諸問題を念頭に置いた上で、大学の自治や学問の自由を保障することは当然ですが、研究者自身もこれらは自ら守り抜くことこそが基本であることを認識しなければなりません。

このような観点から学術経営、ひいては大学経営を考えようとすると、大学と社会との実質ある連携、特に同窓生との強い連携が重要になってくるのは必然であります。まず、「社会連携推進体制」についてであります。

名古屋大学は、産学官連携を大学の社会的責任の一つとして捉え、自由で創造的な研究成果をシーズとして社会に提供する努力をしております。しかしながら、従来型の産学官連携を含む社会連携の多くは、主に研究者個々人の努力で行われておりました。社会連携がますます重要性を増している現在では、連携を「点から面へ」(個人から組織へ)と展開・発展させ、大学



として組織的に関わるのが重要となっています。また、大学の社会連携の窓口が不明確であることや、大学としての対応が遅く不十分であることなど、ユーザーの視点に立った対応の遅れが指摘されております。

名古屋大学では、これらの反省をもとに、昨年5月、組織的・総合的な組織である「社会連携推進体制」を新たにスタートさせました。併せて、大学と地方自治体間の情報交換、事業協力及び交流活動を通して地域振興を図ることを目的として、「社会連携推進協議会」を設置しました。

皆さんが、いかなる職場に身を置かれるとしても、大学が必要で、かつ有効になる時が、必ず来る筈です。母校に整備された、これらの推進体制を、常に念頭に置いていただき、是非活用されることを期待し、要望いたします。

次には、一層直接的な皆さんと名古屋大学との連携強化についてであります。国立各大学は、法人格取得という学制始まって以来の第3の大浪とも言うべき大変革期を迎え、新しい大学の在り方を模索しています。名古屋大学は、基幹総合大学としての責務を持続的に果たすために、活発な情報発信と人事交流が必須だと考えております。そのためには、大学構成員と同窓生が一体となった協力活動が不可欠であります。

従来は、部局同窓会が同窓生間の情報交換の役割を果たしてきましたが、その活動はそれぞれの部局に限定されておりました。今後は、大学と全学同窓会が研究教育及び社会的活動に関する情報を、広く共有し、社会のニーズに応える必要があります。また、同窓生にとっても、専門分野を超えた情報交流が従来にも増して重要になってきます。名古屋大学に10万人規模の「全学同窓会」組織が昨年10月27日に設立されたことは、世の注目を集めたばかりか、法人化を控えた本学にとっても心強い支援となります。皆さんに一層の誇りを持っていただける名古屋大学に発展させることを約束し、併せて、同窓会活動に積極的に関与されることを要望いたします。

今後、皆さんには失敗も挫折もあるに違いない。し

かし、怯んだり、まして恐れたりしてはいけません。それは、青春の気概に満ちた皆さんに似つかわしくありません。年齢をとって振り返ってみた時、どれもこれもが人生を鮮やかに彩る事象であった、と思いつけるような、生き生きとした人生の、新たなるスタートを切られることを心から期待しております。

以上をもって、大学院修了生への辞といたします。





総長の辞（2003年学部卒業式）

松 尾 稔

名古屋大学は、本日ここに平成14年度の学部卒業生2,194名に学士の学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに、本学の教職員を代表して心からお祝い申し上げます。皆さんの中には、大学院へ進学される方々が約1,050名、また海外へ遊学されたり就職して社会で活躍しようとされている方々が約830名おられます。それぞれの進路には意義こそあれ、もちろん何の差別もある筈がありません。とは言え、大学院重点大学としての本学の性格上、博士課程への進学者が多いのが特徴であります。外部から本学へ進学してくる人たちも加えますと、一昨年度以来、すでに大学院入学人数が学部入学人数を越えましたので、来年度も多分そのようになろうかと思っております。

さて、皆さんは、名古屋大学で過ごされた学生生活、それは医学科の学生にとっては6年間、他のほとんどの人たちにとっては4年間でありましょうが、若き日のこの貴重な時期に多くのことを学ばれたに違いありません。楽しいことも数多くあったでしょうが、半面、学習や人間関係上の深い苦悩もきっとあったに違いありません。しかし、これこそ、皆さんの年頃にのみ与えられた、「肉体の若さ」と「心の若さ」の併存した、いわば「真の青春時代」の証でもあります。本日は、卒業という人生の一つの節目を迎えた満足感に浸りつつ、それぞれに、これから始まる新しい生活に対し、青春の気概に満ちた、潑刺とした気分で、今、ここに出席されているものと信じます。皆さんの高揚した気持が、この講堂に満ちて、私にも強く伝わってまいります。皆さんの将来が明るく、大きく拓けていることを期待し、そのスタートラインにつかれたことに対し、心から拍手を送ります。

冒頭に紹介しましたように、皆さんのうち約半数の



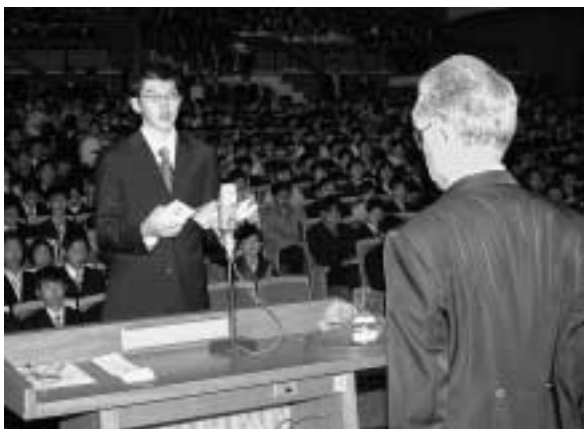
方々は大学院において学生生活を継続され、一方、残りのほとんどは、職業人として働き、所得を得る生活へと進まれます。今後何年間かは、互いに随分違う環境での生活になりましようから、私は卒業式においては、いつも皆さん両者にとって、共通と思われる課題を取り上げ話す努力をしております。

とは言っても、私が皆さんに送る辞の本質は変わりようがありません。それは当然のことです。私が卒業式で式辞を述べるのは、今回が6回目となります。最初は平成3年度の卒業式でした。当時の早川幸男学長が2月に急逝され、私が学長事務取扱として式辞を述べました。その後は、平成10年に総長に就任して、今回が5度目であります。平成3,4年の頃と、ここ4,5年を比較すると、主として我が国の経済状況に依存する社会の活性度が大きく異なっているのは確かであります。またこの数年においても、細かく見れば、いろんな変化が認められます。したがって、卒業式で取り上げている具体的問題は、その年々によって種々異なりますが、私の根本的な考え方、やや大げさに言えば、自己の人生観は短期間で変わりようがありません。

私が卒業生に対し、変わらず述べていることは、まず第一に、大きな流れとしての世界や日本の変化、それに対する認識の重要性とそれへの対応の在り様についてであります。第二点目はさらに本質的なことです。人、特に日本人の寿命は随分伸びたとは言え、私たち人間が生きる時間の短さ - 宇宙や地球の歴史に比べての短さ - に対する自覚と、それ故に後の世代の人たちのことをしっかりと念頭において、懸命に生きることの貴さについてであります。今年も同じ観点に立って話してみたい。

まず第一の点です。現代は、世界的な規模で、あらゆる分野におけるパラダイム - その時代、時代を画した支配的な考え方 - が、歴史的な大転換期に突入している時代です。私は、戦中・戦後の本当に貧しい期間に青春時代を送りました。私たちの世代には言葉で表現出来ないほどの苦しみがありました。しかし、特に、第2次世界大戦敗戦後は希望を持って、ひたすらに、言い換えると、皆がむしゃらに働いてきました。それこそが、誰も疑うことのない「善」であると信じてやってきたのです。

加えて、20世紀は、「電子工学の時代・石油化学の時代・交通革命の時代」等々と呼ばれる「科学技術の世紀」であったことは、紛れもない事実であります。特に、20世紀後半における科学技術の進展は、日本を含む先進諸国に高度技術社会を実現させるなど、総じ



て、人類の生活向上に多大の貢献をしたかにみえます。それは、世界的な平均で見て、寿命は大幅に伸び、所得は増大し、人の移動距離と速度が格段に上昇した事実からしても、明らかであります。しかし半面、同時に、地球規模での環境問題や南北格差の拡大、科学技術そのものが生み出した予想もしなかった犯罪や倫理問題など、多くの負の遺産を残し、今、私たちに強い反省と修復を求めているのもまた事実です。

幸いにも地球規模での大戦争は半世紀以上も生じておりません。世界を二分した東西の冷戦構造も崩壊し、戦争は終わったかに見えます。特に、「安全と水はタダだと考えている」と皮肉られた私たち日本人にはそのように見えました。しかし、世界はそれほど単純ではなかったですね。今さら言うまでもありませんが、5日前に遂に現実のものになってしまったアメリカによるイラクへの武力攻撃は、世界を、これまでとは異なる種類の「憎しみと恐怖」に陥れる危険を孕んでおります。さらに遡って2001年9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービル攻撃によって始まった組織的なテロ事件は世界的に拡がる兆しを見せ、「新しい形の世界的戦争」だと呼ばれるようになっていきます。悲惨な地域的紛争は世界の各地で間断なく生じており、最近の中東及び極東における不安定な政治情勢は、「天真爛漫な日本人」も含め、世界を不安感で覆っていると言っても過言ではありません。

一方で、物質的豊かさを懸命に追求してきた半面、後の世代に大きな課題を残したことも事実です。それらの課題については、多くの人が何度も言っていることですから詳細は省きますが、数えだすと枚挙にいと間がありません。ほとんど全てが広い意味での環境問題、エネルギー、資源、食糧、災害問題等々に関するものです。南北格差は広がるばかりです。

ここでは一つだけ申しあげておきます。私はそれら諸問題の中でも、全部を包含する基本的課題として、21世紀最大の難問は「水問題」だと考えています。先に「日本人の多くは水はタダだと思っている」と述べた、その「水」です。水は全ての問題の根元です。3

月16日から始まった「第3回世界水フォーラム」が昨日終わったばかりですが、水問題の具体例として、一つだけ挙げておきましょう。現在東シナ海は、日本を含む近隣諸国にとって魚の宝庫です。漁獲量は年50万トンを超え、多くの人間がその恩恵に浴しています。しかし、長江の富栄養化がこのまま進むと、九州付近をも含み、その影響は東シナ海全域に及び、エサの減少、赤潮の頻発を経て、やがて東シナ海から魚が姿を消す、と国連の調査団が、環境影響評価の一環として、すでに3年も前に発表しています。これは、いわば開発に伴う、思わぬ側面の一つに過ぎません。

今回、本日の話の原稿を作るに当たり、科学技術に関するこの種の問題をメモしてみました。次から次ぎへと浮かんでまいります。何を話したら良いのか分からなくなるほどに、予想外の影響が多々生じております。いうならば、科学技術の進歩・生活の向上とそのパラドックスに関連する問題です。

バイオテクノロジー、生命科学の分野などは、皆さんにも最も関心の高いところでしょう。動植物を対象にした「ゲノムやポストゲノム」、「クローン技術」、「臓器移植や再生医療」、「遺伝子技術の活用による食料生産や治療」問題など、最近これらの用語を耳にしない日はありません。多くの人々がその成果に大きな期待を寄せつつも、「生まれる動物」から「作る動物」へ、「育つ植物」から「作る植物」への転換に不安を隠しえずにいることもまた事実です。ごく最近の「クローン人間作成」ニュースなどは、その最たるものでしょう。

断っておきますが、私は21世紀が暗い時代になると言っているわけではありません。難しい時代が予想されるが、明るい時代になって欲しいと心から望んでいるのであります。今述べた生命科学関連の問題も、要するに「科学技術と倫理」の問題であります。

本日はまず第一に、「大きな流れとしての世界や日本の変化、それに対する認識の重要性とそれへの対応」について語ると言いながら、まだこの命題のごく一部しか話しておりません。話すべきことは、他にも沢山

ありますが、時間がありません。私の申し上げたいことの大意は分かっていたいただけたと信じたい。要するに、「大きな潮流、そしてそれが有する良い面、悪い面を、他者のものではなく自己の問題として捉え、よくよく考え、まず認識を深める」ことです。突然のヒラメキで、あたかも「無から有が生まれる」ように言う風潮がありますが、それは幻想です。幅広い知識と、深い認識なくしてヒラメキなどあろうはずがありません。幻想に捉われてはいけません。「現代を生きている」という証を、自分自身で持ち続けられる人生であれば、どれほど素晴らしいことでしょう。

さて、第二には、人間が生きる時間の短さを自覚した上で、懸命に生きる姿に貴さを感じず、と申しました。これは第一の話の、いわば続きです。

45億年と言われる地球の年齢はもちろん、10数万年とも言われる人類の歴史に比べても、私たちはごくごく僅かな時間を、しかし精一杯この地球の恩恵をこうむって、生きているのであります。私のような凡人には、千年、1万年先はおろか、2、3百年先のことも予想できません。しかし、後の世代の人々や、千年先の地球に対し、重要な責任を有していることは紛れもない事実です。環境問題一つとっても、誰にも理解できることです。何故なら、「環境」は、自己がすでに存在しえない「後の世代」の人たちとの「共有財産」であるからです。この種の問題は沢山あります。自分



で考えてみてください。

ましてや、個人や組織を問わず、ここ一兩年噴出した、いわゆる“ダマシ”に類する反社会的行動などは論外であります。このようなことは「勇気ある知識人」を「学術憲章」の柱として高らかに謳っている名古屋大学の卒業生としては全く相応しくない。組織の長が“世間をお騒がせして誠に申しわけない”などと、意味不明なことを言って、頭を下げることで、「謝罪」は終わり、という妙な風潮がまかり通っています。このようなことに対し、若干口汚く言うと、「ふざけてもらっては困る！」と憤りを感じた世間の人たちは多いに違いありません。こんな方法は「謝罪」とは言わない、と言う意味においてであります。「懸命に生きる」姿に貴さを感じ取っている人たちにとっては、このようなことは正に、別世界の人たちの態度とも言うべき遠い所に存在する事象でしょう。

さて、時間が迫ってきました。明るい方に話を持っていきたい。国際社会の一員としての日本の役割は何か、個人的な無力感を乗り越えて自分に出来ることは何かを模索することこそ、基本的に重要なことと思っています。

本日は、科学技術の進展のパラドックスとして生ずる負の側面をやや強調しすぎた嫌いがあります。しかし、これらに対する認識が重要だと申し上げたかったのであって、科学技術のさらなる進歩なくして将来は



あり得ない、と言うのが、本日私が皆さんに言いたい本意です。我が国に関する敗戦直後の画期的であった事柄について申し上げます。

それはノーベル賞についてであります。よくご承知のように、ノーベル化学賞は白川英樹先生、我が大学の野依良治先生、田中耕一先生が、ここ3年連続受賞され、昨年度は小柴昌俊先生がノーベル物理学賞を受賞されました。先生方の卓越した能力の賜であることは言うまでもありませんが、日本における基礎研究分野のレベルの高さを見る思いで、日本中が喜びを分かち合いました。教育研究の場である大学にとっては、そのインパクトの大きさはまた格段のものがあり、特に一昨年の野依先生の実績は、先生のお喜びは当然として、名古屋大学の教職員、学生、さらには受験生の気持ちの高揚、研究意欲の奨励に絶大な効果をいただきました。

それに付けて思い出すことがあります。昭和24年（1949年）湯川秀樹先生のノーベル物理学賞の受賞です。皆さんはもちろん、ひょっとすれば皆さんのご両親さえまだ生まれていなかったかも知れない時期です。したがって、皆さんが湯川秀樹先生の名前は知っていても、当時の日本の社会情勢を知るわけはありません。私はその時、中学校の1年生でした。日本は昭和20年（1945年）に、第二次世界大戦に敗れ、国土は荒廃し、経済と生活はまだまだ極貧に近く、国民の心は荒れすさんでいました。その時に2人のヒーローが現れたのです。敗戦国としてまだオリンピックの参加を許されない時代に次々と世界記録を樹立し、「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた水泳の古橋廣之進さんと、そしてこの湯川秀樹先生です。この2人が、沈みきっていた日本人に与えた喜びと、国土復興に向けた勇気がどれほど大きかったかは、機会があれば、皆さんの周りの年配の方々に聞いてみて下さい。「ノーベル賞が戦後を変えた」と考えている日本人はまだまだ沢山生きています。

ただし、私の専門の一つは信頼性解析・信頼性設計と呼ばれる分野です。もちろん、科学技術においては100%の成功はありえないことをよく知っています。宇

宙衛星は、典型的な「信頼性工学の固まり」のようなものと言ってよい分野の一つです。先頃のスペースシャトル「コロンビア」の悲劇的な事故を挙げるまでもなく、科学技術の進展には常にリスクを伴います。しかし、リスクに怯まず「懸命に生きる」人たちの姿に貴さを感じずにはられません。

常に教訓と謙虚さを根底に抱きつつ、科学技術に対する果敢な挑戦を怠ってはなりません。基礎研究を技術、さらには産業にいかにつなげていくかは、日本だけの問題ではありません。と同時に、社会に対する説明責任、科学技術と倫理の関係を忘れてはなりません。20世紀は技術革新の時代であったが、日本にとってのここ数年は停滞と混迷の時代、「失われた10年」であったとメディアは書き立てています。大学を含め、各機関や組織の構造変化に向けての苦しみは続いています。遅々として進まないのも事実です。しかし、「失われた10年」であったのか、「構造改革に要した10年」であったのかの判断には、もう少し時間が必要ではないでしょうか。皆さん、自分なりの人生を懸命に生きましょう。コトの大小に拘わりなく、これまた素晴らしいことと信じます。

最後に近づいてきました。名古屋大学と皆さん個人に直接関係し、そして皆さん自身が身近な問題としてすぐになし得る一つのことに、どうしても触れておきたい。昨年10月27日に、長年の念願であった「名古屋大学全学同窓会」が設立されました。社会に開かれた大学としての名古屋大学が「知の拠点」としての存在価値を認められるためには、大学の構成員のみならず、同窓生の大きな力を必要としています。大学と同窓会が密接に連携して社会に一層の情報公開を行い、社会からの種々のニーズを汲み上げる必要があります。本学の全学同窓会の特徴は、その構成員が卒業生だけではなく、教職員やかつて教職員であった方々、さらには本学に関係した全ての人たち、10万人から成る、新しいタイプの同窓会だという点にあります。外国人の教官・研究生・学生を含むのももちろんであります。専門分野を越えた情報と人的交流を通してなし得るこ

とは沢山あると信じます。皆さんに一層の誇りを持っていただける名古屋大学に発展させることを約束し、併せて、同窓会活動に積極的に関与されることを期待し、かつ要望いたします。

過去の歴史と現在の状況を深く認識し、その上で、後の世代のことを念頭に、国として、大学として、そして個人として、できることからやってまいりましょう。

再度申し上げたい。青春の気概に満ちた皆さんへの期待は実に大きい。柔軟な頭脳と、凜とした強い意志、さらに若き肉体を持って、希望に満ちた、明るい気持で人生の新しいスタートを切られることを切に望みます。

以上をもって、卒業生への辞といたします。





男女共同参画室を設置

本学では、国立大学としては初めて「男女共同参画室」を設置し、1月21日に、男女共同参画担当総長補佐の金井篤子助教授を室長とし、室員2名の計3名でスタートしました。

このたび、3月19日に松尾総長はじめ関係者の出席のもと、松尾総長揮毫の看板の上掲式を行いました。松尾総長より男女共同参画室の設置に至るまでの経緯や同室の役割などについて説明があった後、松尾総長、伊藤副総長、金井男女共同参画室長及び小池事務局長による看板の上掲が行われ、同室を公開しました。

同室は、名古屋大学の女性教官比率を上げるための施策をはじめとして、育児・介護に関する環境整備の検討、産学官の連携フォーラムを立ち上げ、中央省庁や自治体などと協力体制をとって政策提言を行うなど、男女共同参画社会の実現に向けて、その活動が期待されているところです。



上掲式後の記者会見



文学研究科が 公開シンポジウムを開催

文学研究科は、一般社会人・市民を対象とした公開シンポジウムを3月15日に経済学部第1講義室において開催し、約250名が参加しました。

同公開シンポジウムは、平成12年度から毎年開催しているもので、3回目に当たる今回は、「中国文化の広さと深さ - 人・物・詩の心 - 」と題して行いました。

神尾研究科長の挨拶に始まり、次いで、二松学舎大学石川忠久学長による基調講演「日本の漢詩 - 江戸から明治へ - 」が約1時間にわたって行われ、日本の漢詩について、わかりやすく説明され、巧みな話術により参加者は熱心に聞き入っていました。

続いて、同研究科から、江村治樹教授が「中国古代青銅器の魅力 - 殷周から春秋戦国へ - 」、竹内弘行教授が「中国文化を尾張にもたらした人 - 陳元賛の人と思想 - 」とそれぞれ題して、人・物の視点から中国文化について、一人約40分の持ち時間で報告を行いました。各講演毎に参加者からの質問に応える形式で、活発な議論が繰り広げられ、盛況のうちに閉会しました。

なお、この公開シンポジウムは、報告書としてまとめ公表することとしています。





「社会連携連絡協議会」を設置 - 太陽地球環境研究所が陸別町と -

太陽地球環境研究所では、陸別町（北海道足寄郡）内に総合観測室を設置している同研究所の研究成果を地域に還元しようと、陸別町と連携して「社会連携連絡協議会」を設置し、3月3日に陸別町役場で第一回会議を開催しました。同町では同研究所の教授らによる講演会や小・中学生向けの出前授業などの実施を希望しており、今後、人的・物的の両面で地域貢献が図られる予定です。

独立行政法人化を前に国立大学はより一層地域に根ざした主体的活動が求められており、この連絡協議会の設置も文部科学省が地域社会と国立大学とのパートナーシップの強化を促進する「地域貢献特別支援事業」として実施するものです。

会議では、同研究所から上出所長のほか各観測所長（教授）を含め6名が、陸別町から金澤町長、助役、

教育長、産業振興課長ら6名が出席し、上出所長から「予算措置のある事業年度以降も町との連携を続けていきたい」との発言に対し、金澤町長から「町では息の長い地域貢献に期待を寄せている」との発言がありました。

また、同研究所では社会連携の一環として、分かりやすく解説した冊子「オーロラ 50のなぜ」、「オゾン40のなぜ」を既に刊行し、今後、太陽、惑星、地球温暖化等のテーマでシリーズ化を予定しているとともに、一般公開型天文台として国内第2位の反射望遠鏡（口径 115cm）を有する陸別町立「りくべつ宇宙地球科学館」を通して、来年度以降は全国レベルの研究会の開催、一般展示、ビデオ「地球は太陽の中にいる（仮題）」の製作、出前授業などを計画しています。





「毛利フーフェラントコレクション」寄贈に対して 博物館が感謝状を贈呈

「毛利フーフェラントコレクション」は、名古屋医科大学（名古屋大学医学部の前身）出身の内科医、故毛利孝一氏（1909 - 2002）が生涯にわたって収集し、研究した医学史関係資料148点からなるコレクションで、昨年8月に毛利氏の御夫人 毛利美枝子氏より名古屋大学博物館へ寄贈されました。

その中心は、医学史上高名なドイツ人医学者フーフェラント（C. W. Hufeland, 1762 - 1836）の原著と蘭英仏語翻訳書、及び幕末に日本の蘭方医が蘭語版から翻訳した和書のコレクションです。現在、本コレクションの公開に向けて、愛知県内科医会の御援助により古書の補修を行っています。

こうした御厚志に心からの感謝の気持ちを表すため、3月14日、毛利美枝子氏（代理、ご長女長尾友子氏）と愛知県内科医会（太田宏会長）に対し、足立 博物館長が感謝状を贈呈しました。この席には、寄贈に際

して種々ご助言をいただいた高橋 昭 本学名誉教授も立ち会われました。参会者はなごやかに歓談し、フーフェラントの医の倫理を現代に体现された毛利先生のご功績を偲びました。

なお、博物館では、本コレクションの一端を紹介する第2回企画展「フーフェラントと江戸幕末の蘭方医 - 毛利孝一コレクションから」（仮題）を、現在開催中の第6回特別展「失われた文化財 アフガニスタンパーミヤン展」終了後、9月24日（水）から10月19日（日）まで（月火は休館）行うことにしています。

また、本コレクションのリストは『名古屋大学博物館報告』第18号（2002年）に掲載されています。コレクション閲覧についてのお問い合わせは、必ず事前に博物館事務室までご連絡ください。

（電話052 - 789 - 5767）





大学史資料室がワークショップ 「アーカイブズのすすめ(第1回・第2回)」を開催

大学史資料室は、平成14年度からの新企画であるワークショップ「アーカイブズのすすめ」を昨年12月と本年3月の2回開催しました。大学史資料室では、東北大学、京都大学、九州大学等とともに大学文書館(大学アーカイブズ)の創設を目指して様々な活動を行っていますが、今回の「アーカイブズのすすめ」では、文字通り、アーカイブズという概念の普及・定着を図ることを目的にしています。

昨年12月21日に博物館3階の講義室を会場に開催された第1回「アーカイブズのすすめ」では、小川克郎本学名誉教授(前環境学研究科長)を講師に招いて講演会「アーカイブズの意義と国による知的基盤整備政策の動向」と講師を囲んでラウンドテーブル形式で意見交流を行いました。講演後のラウンドテーブルでは、

参加者を事前予約による先着30名に限定したこともあって、和やかな雰囲気の中にも参加者間の熱心な意見交流が行われました。

また、本年3月3日に国際開発研究科8階の多目的オーデトリウムを会場に開催された第2回「アーカイブズのすすめ」では、本年2月に開館した福井県文書館から平野俊幸主任を招いて「福井県文書館の設置について」の講演会を開催しました。当日は、愛知・岐阜・三重・和歌山の各県公文書館等からの参加を含めた約90名の参加者が、最新の福井県文書館について質疑を行うなど、とても活発な意見交換が行われました。

大学史資料室では、平成15年度も継続して「アーカイブズのすすめ」を開催する予定です。





工学部・工学研究科 広報ビデオ完成

工学研究科では、広報活動の幅を広げ、本研究科で実施している特徴ある教育システム「流動型大学院システム」と最先端の研究を広く社会に周知することを目的に、部局として初めて広報ビデオを制作し、計画段階から含めて、約1年の歳月を費やし、制作の最終段階においては、教育学部附属高等学校の1年生の生徒にモニターになってもらうなどし、このほど完成しました。

同ビデオは、「21世紀～工学への誘い～」と題し、流動型大学院システムの紹介はもとより、本学部に入学を希望する高校生にも興味を持って見ていただけるよう、現役学生のインタビューや「モノづくり」教育及び「高度総合工学創造実験」といった特色のある授業風景等の映像をふんだんに収めています。

また、工学研究科の最先端の研究として、応用化学専攻 岡本佳男教授の「キラル分離剤の開発」、電気工学専攻 毛利佳年雄教授の「磁気インピーダンス効果による高感度マイクロ磁気センサ」とともに名古屋大学の名誉教授であり、元工学部の教官である赤崎 勇先生の「青色発光ダイオード」の研究について紹介しています。

なお、同ビデオは、DVD 及び CD-ROM としても作成し、ビデオについては、300本近くを高等学校や予備校等を中心に配布し、貸出も行うこととしています。

今後、工学研究科のホームページからも見ていただけるようにするとともに、英語版の作成も計画しています。



工学研究科、関連研究科・センター研究者総覧 「創成：名古屋大学工学研究科の躍進」が完成

工学研究科では、平成11年4月に発行した「創成：名古屋大学工学研究科の挑戦」の改訂版を冊子名も「挑戦」から「躍進」に改め、このほど刊行しました。

同冊子は、工学研究科並びに関連研究科・センターに所属する教授、助教授及び講師を対象に研究内容と特長、研究成果や今後の展望を中心に掲載されており、研究者相互の情報交換と異分野間の連携を促し、新研究の展開及び教育・研究における産学連携・地域連携に資するために作成されたものです。今回、発行後4年近くを経過し、構成員の顔ぶれも変わり、また、その当時に比して、研究内容や成果等においても変化がみられることから、改訂版を発行することとなったものです。

なお、同冊子は、企業の方を中心に希望者に対し、広く配布することとしており、また、その内容は、近く、工学研究科ホームページに掲載することになっています。(問い合わせ先 電話052-789-3407)



INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（15年3月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	愛知教育大は本学との統合を断念「教員養成」「研究」性格の溝埋まらず 伊藤正之副学長の話「今後連携できるテーマを探し、理解深めその先に統合が見えてくればいい」	3 .1(土)	中日(朝刊) 他3社
2	ベンチャーの風：閉塞感打ち破る原動力 2月下旬本学と南山大が共催のベンチャーセミナー	3 .1(土)	中日(朝刊)
3	本学宇宙塾「星の誕生を観測しよう」小中学生対象に理学部で開催	3 .3(月)	中日(朝刊)
4	心筋こうそく誘発遺伝子 横田充弘・医学系研究科助教授らのグループが発見	3 .4(火)	読売
5	名大サロンの主役：村上隆・教育発達科学研究科教授「心を測る - パーソナリティーから入試まで」と題し講演 入試をつくる側から問題点を解説	3 .4(火)	中日(朝刊)
6	本年度で本学退官 25教授の記念講演	3 .4(火)	中日(朝刊)
7	金子章名誉教授 28日急性大動脈解離で死去	3 .4(火)	読売
8	第18回中日フォーラム顧問会議 育て世界標準の創造人 学校外にも教育の場を「初等・中等教育はいま 大きな構想が必要」松尾稔総長	3 .5(水)	中日(朝刊)
9	予知最前線：山岡耕春・地震火山観測研究センター助教授に聞く アクロス探査法、地下の「波」を分析	3 .5(水)	毎日(朝刊)
10	附属図書館特別展 発見した宝暦治水“原案”古文書を公開 テーマは「川とともに生きてきた ~ 新発見史料・北高木家関連文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術」	3 .5(水) 3 .8(土)	読売 中日(朝刊)
11	この人：「痛み学講座」を開設した愛知医大教授 熊沢孝朗・名誉教授 患者には止めてもらう権利、医者は止める義務がある	3 .5(水)	中日(朝刊)
12	予防医学に功績の加藤勝也賞決まる Aグループ(個人)に若井建志・医学系研究科講師	3 .7(金)	読売
13	医療：加齢黄斑変性 温熱療法、赤外線レーザーで視力回復 本学医学部附属病院でも実施	3 .7(金)	読売

	記 事	月 日	新聞等名
14	本学で合格発表 合格者は9学部合わせて1576人	3 .8(土)	中日(夕刊) 他2社
15	叙位叙勲：金子安之名誉教授、従四位に	3 .8(土)	中日(朝刊) 読売
16	附属病院に院内PHS 昨年の手術ミス教訓に 診療科の枠を超えた緊急呼び出し体制を強化	3 .11(火)	中日(朝刊) 他2社
17	2月にスタートした高等教育院 野依良治教授(院長)に狙いを聞く「看板背負うスター学者には研究フルスイングしてもらいたい」	3 .11(火)	中日(朝刊)
18	宇宙天気図でオーロラ予報 太陽地球環境研究所がネット公開	3 .11(火)	中日(夕刊)
19	第一回野依科学奨励賞 19小中学生が受賞	3 .11(火)	中日(夕刊)
20	「医療に関する苦情相談センター」委員 加賀山茂・法学研究科教授に聞く「素人主権」の第一歩になることを期待	3 .12(水)	中日(朝刊)
21	中日くらし友の会主催、公開講座「名古屋を中心とした近代建築」講師は博物館明治村館長・飯田喜四郎名誉教授	3 .12(水)	中日(朝刊)
22	文学研究科公開シンポジウム「中国文化の広さと深さ～人・物・詩の心」 経済学部第一講義室	3 .12(水)	毎日(朝刊)
23	愛知県がんセンター総長に 医学部卒の大野竜三氏	3 .12(水)	読売
24	細胞移植で骨再生 骨髓液から採取した肝細胞を注入して骨を再生 上田実・医学系研究科教授らのグループ成功	3 .13(木)	中日(朝刊)
25	広がる再生医療 期待される実用化 骨髓細胞移植し毛細血管再生 室原豊明・医学系研究科教授らのグループ	3 .13(木)	日刊工業
26	森滋勝・先端技術共同研究センター教授や中央化工機など共同 木材粉碎機開発	3 .13(木) 3 .14(金)	中日(朝刊) 日刊工業
27	骨芽細胞移植 難病の少女、半年で身長10センチ伸びた 医学部整形外科教室の再生医療グループ全国初 再生医療に応用も	3 .13(木)	読売 日経(夕刊)
28	市川真人名誉教授 12日死去	3 .13(木)	中日(朝刊)
29	後房雄・法学研究科教授が日本国際博覧会協会委託を受け 同協会に7項目の報告書を提出	3 .13(木)	朝日(朝刊) 日経(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
30	地震対策「名大」もと暗し 学内、危険いっぱい	3.13(木)	朝日(夕刊)
31	本学入試 物理出題ミス	3.14(金)	読売 他3社
32	人食いバクテリア感染 附属病院、昨年 緊急入院の2人死亡	3.14(金) 3.15(土)	読売 他4社
33	野依良治教授の学会主催 「ノーベル賞」戯曲公演へ	3.14(金)	朝日(朝刊)
34	文学研究科オープンレクチャー 「大須観音所蔵東西自筆書状について」稲葉伸道・文学研究科教授	3.14(金)	中日(夕刊)
35	本学卒業式 ベトナム人院生が総代に	3.15(土)	中日(夕刊)
36	毛利孝一・元内科医会名誉会長の遺族 幕末の医学書150点を本学博物館に寄贈	3.15(土)	読売 日経(朝刊)
37	日本化学会は日本化学者の業績を紹介した英語本を世界に発信 野依良治教授らノーベル賞受賞者等も掲載	3.16(日)	毎日(朝刊)
38	わくわく探検：花の色って不思議...色素の代表はアントシアニン こども記者が吉田久美・人間情報科学研究科助教授を訪ねる	3.16(日)	中日(朝刊)
39	植物ゲノム解説、日本産業利用出足重く 「金を稼げる遺伝子を押さえること」と松岡信・生命農学研究科教授	3.17(月)	日経(朝刊)
40	藤田保健衛生大が本学教官招き医学部4年の臨床能力試験	3.17(月)	毎日(朝刊)
41	メディア祭開催 会長・横井茂樹・人間情報学研究科教授	3.17(月)	中日(朝刊)
42	タイのセラロンコン大の院生、本学に	3.18(火)	朝日(朝刊)
43	「糖尿病 予防と治療のストラテジー」(名古屋大学出版会)が刊行された	3.18(火)	読売
44	東海3県で計13人が退官 本学では 太田龍朗・医学系研究科教授 中島伸夫・医学系研究科教授 久場健司・医学系研究科教授	3.18(火)	読売
45	社会現象に目を向け地道な調査で成果 経済学部図書館に眠る卒論を筆者に返却	3.18(火)	中日(朝刊)
46	法人化に備え体制強化のため 副学長を3人に 奥野信宏学長特別補佐 中島泉学長特別補佐 佐々木雄太副学長が選定された	3.19(水)	中日(朝刊) 読売
47	本年度の財団賞決定 学術賞、石田幸男・工学研究科教授 国際交流助成金、木村英彦・工学研究科 文部化学教官助手	3.19(水)	中日(朝刊) 日刊工業
48	JST戦略的創造研究推進事業 基礎研究12課題・若手個人研究7課題を04年度も継続 基礎研究推進事業では梶見明弘・理学研究科教授	3.19(水)	日刊工業

	記事	月日	新聞等名
49	国連安保理決議なき攻撃、国際法に違反 松井芳郎・法学研究科教授ら研究者が声明	3.19(水)	中日(朝日)
50	叙位叙勲：柏木千秋名誉教授、正四位に	3.19(水)	読売 中日(朝日)
51	東海地震被害想定 愛知の死者最悪600人 福和伸夫・工学研究科教授の話「東南海地震が連動して起こることも考え、被害対策を進める必要がある」	3.19(水)	読売
52	本学は、国立大学で初の「男女共同参画室」を開設 女性教官の登用推進	3.20(木)	読売 他3社
53	銀河系の大爆発で発生、膨張する分子ガス雲 理学研究科天文物理学研究室が電波望遠鏡「なんてん」で観測	3.20(木)	読売 中日(朝刊)
54	「ノーベル化学賞受賞者名古屋国際フォーラム」が豊田講堂で開かれる 台湾人初受賞者らが出席	3.20(木)	朝日(朝刊)
55	内藤純一・経済学研究科教授に聞く 金融再編の行方 地域活性化へ推進必要 体力強化、企業の成長支援	3.21(金)	日経(朝刊)
56	イラク攻撃 時期最悪中部空港に影響も 家森信善・経済学研究科助教授	3.21(金)	中日(朝刊)
57	69歳経済学研究科・今田聡さんが博士課程を修了	3.21(金)	中日(朝刊)
58	「ノーベル化学賞受賞者名古屋国際フォーラム」野依良治教授が講演、冒頭で「殺し合いは愚か」と開戦を嘆いた	3.22(土)	朝日(朝刊)
59	本学卒業式 松尾稔総長ら米の攻撃批判 大学院総代はベトナム留学生	3.25(火) 3.26(水)	毎日(夕刊) 他2社
60	東京事務所開設 来年の国立大学法人化を控え、学生会館内にサテライトオフィスを開設	3.25(火)	中日(朝刊)
61	植物の成長操る新たなばく質 生物分子応答研究センター・松岡信教授らのグループが発見	3.25(火) 3.27(木)	朝日(夕刊) 中日(朝刊)
62	イラク戦争論考：国際法秩序に何をもちたらずか 松井芳郎・法学研究科教授	3.25(火)	中日(夕刊)
63	叙位叙勲：金子章名誉教授、正四位勲三等旭日中綬章に	3.26(水)	読売
64	イラク攻撃とイスラム世界 民主化、欧米と異なる伝統 中西久枝・国際開発研究科教授	3.26(水)	朝日(夕刊)
65	文部科学省の大学評価・学位授与機構 国立大28校の教養教育「改善が相当必要」産学協同は「達成」	3.27(木)	中日(朝刊) 他4社
66	あす市交通問題調査会が初会合 委員は 加藤博和・環境学研究科助教授 広瀬幸雄・文学研究科教授 森川高行・環境学研究科教授など	3.27(木)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
67	老年学：長すぎる昼寝むしろ害 井口昭久・医学系研究科老年科教授	3 27(木)	朝日(朝刊)
68	ジャン・ギャスライトさん 4月から 生命農学研究科博士課程に入学	3 29(土)	中日(朝刊)
69	秋山健太郎・中部電力緑電力センター所長 経済学研究科修士課程を修了	3 29(土)	中日(夕刊)
70	厚生労働省科学研究費 交付遅れ 研究者悲鳴 本学教授ら「何のための補助」とあきれ	3 29(土)	中日(朝刊)
71	星の誕生神秘 小中学生が観測 理学研究科天体物理学研究室主催 「宇宙塾」	3 29(土)	中日(朝刊)
72	キックコーナー：人間と猿の間 森田美弥子・教育発達科学研究科教授	3 29(土)	中日(夕刊)

	記 事	月 日	新聞等名
73	「古文書の世界」栄中日文化センターで 講師：秋山晶則・附属図書館研究開発室助手	3 30(日)	中日(朝刊)
74	附属高校「ジェンダー」を教科書に授業 平和や共生に欠かせぬ視点	3 31(月)	中日(朝刊)
75	明日の人に：競争で「選ばれる大学」を 本学出身、藤本哲夫・名城大理工学部長	3 31(月)	読売
76	口之島牛を国の天然記念物にしようと、富田武名誉教授など研究者が十島村長に要請	1 30(木)	朝日(朝刊)
77	十島村と鹿児島市を結ぶフェリー「としま」に自作の歌贈ります 富田武名誉教授	2 21(金)	朝日(朝刊)

お詫びと訂正

名大トピックス No.116 (平成15年1月31日発行) のちょっと名大史 と No.118 (平成15年3月31日発行) の新聞記事掲載一覧に誤りがありました。
ちょっと名大史 1行目 1969年を1964年に訂正
新聞記事掲載一覧 28 宮治昭名誉教授を宮治昭教授と訂正させていただきます。慎んでお詫びします。

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ちよっと名大史

医学部附属病院分院（東新町時代）

現在、本学の医学部附属病院は分院組織を持っていませんが、1949年5月の新制名古屋大学設置以降、1996年までは医学部附属病院分院が設けられていました。その前身は、1943年5月に陸田志よう氏から寄付を受けた市内中区新栄町三丁目（現在の中区栄四丁目）にあった陸田ビルの敷地・建物を使用した名古屋帝国大学医学部附属医院分室でした。その後この分室は、翌1944年5月に正式に医学部附属医院分院としての設置が認められています。

なお、附属医院（病院）分院の所在地は、設置当初の 市内中区新栄町三丁目（現在の中区栄四丁目）から、1961年には 市内東区東門前町二丁目（現在の東区東桜二丁目）へ、また1979年には 市内東区大幸一丁目（現在の東区大幸南一丁目にある大幸医療センター）へと移転しています（下図参照）。『名古屋大学医学部附属病院分院記念誌』（1997年）では、それぞれを 東新町時代、 東門前町時代、 大幸町時代と呼んでいます。

写真は、東新町時代（分院開院当時）の建物風景および陸田ビル（分院）の石膏模型です。この分院は、993㎡の敷地に5階建て鉄筋コンクリート（延べ3781㎡）の建物で、当初から11の診療科（内科・外科・整形外科・眼科・産婦人科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚泌尿器科・神経精神科・放射線科・歯科）が置かれて臨床実習ならびに一般診療を行っていました。



名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。